

令和元年度

第六十五回青少年読書感想文コンクール

札幌市読書感想文コンクール部門

受賞作品集

小学校・中学校・高等学校

札幌市学校図書館協議会

賛・協・援 後

札幌市

札幌市議会

札幌市教育委員会

札幌市PTA協議会

北海道高等学校PTA連合会石狩支部

北海道教育評論社

㈱平和堂

学校法人北邦学園

㈱図書館ネットワークサービス

㈱光陽社

キハラ(株)北海道営業所

光村図書出版(株)北海道支社

㈱教育芸術社 札幌出張所

㈱清水書院 札幌営業所

教育出版(株) 北海道支社

紀伊國屋書店 札幌本店

東京書籍(株)

目次

札幌市長賞	ある晴れた夏の朝に届くように	札幌市立向陵中学校 三年 渡邊 光麗 1
札幌市議会議長賞	『女の一生』を読んで〜伊藤を通じて感じたこと〜	札幌聖心女子学院高等学校 二年 児玉 優子 2
札幌市教育長賞	お母さん、おそろべし	札幌市立清田緑小学校 三年 東地 賢頼 3
札幌市学校図書館協議会会長賞	心をさがそう	札幌市立白楊小学校 二年 川上 慶悟 4
札幌市学校図書館協議会会長賞	チャーリィが教えてくれたこと	北嶺中学校 三年 玉田 光 5
札幌市学校図書館協議会会長賞	私の救世主	札幌光星高等学校 一年 加藤 萌香 6
札幌市PTA協議会会長賞	命の差別	札幌市立栄北小学校 五年 横山 英伶 7
札幌市PTA協議会会長賞	『ある晴れた夏の朝』と動かされた心	札幌市立向陵中学校 二年 増田 美玖 8
札幌市PTA協議会会長賞	真の優しさ、真の幸せとは、「こんなにも優しい世界の終わり方」を読んで	市立札幌旭丘高等学校 一年 岩見 美結 9
北海道高等学校PTA連合会石狩支部長賞	平和をつくる「ミニユニケーション	札幌聖心女子学院高等学校 二年 豊嶋 紅安 10
光陽社賞	のろいアメはまほつのアメ	札幌市立大谷地小学校 二年 豊沢 峰々 11
キハフ賞	星を目指して	札幌市立琴似中学校 二年 野崎 幸子 12
教育出版賞	ウィニー、勇気をありがとう	札幌市立厚別西小学校 四年 坂本 温音 13
北海教育評論社賞	小人のへムが教えてくれたこと	市立札幌旭丘高等学校 一年 山根 里菜 14
図書館ネットワークサービス賞	「メロンに付いていた手紙」を読んで	札幌市立桑園小学校 六年 宮崎 ほのか 15
図書館ネットワークサービス賞	君の臍臓を食べたいを読んで	札幌市立明園中学校 二年 小田島 愛海 16
光村図書出版賞	家族の形	札幌市立向陵中学校 一年 齋藤 亜唯 17

審査

審査基準

- 内容や主題を的確に把握し、自分の考えたことや感じたことを素直に書いているか。
- 身近な問題と結びつけて考え、読み手の生活がにじみ出るように書いているか。
- 表現に工夫のあとが見られるか。(論旨・構想・表現・表記など) 具体的な観点として、次の七点がある。
 - ① 作品を十分に読み込んでいるか。
 - ② 作品から受けた感動・発見・喜びなど読み手の心情が表現されているか。
 - ③ 読み手の独特の受け取りが学年相応に表現されているか。
 - ④ 読み手の日常生活や考え方が、どこかににじみ出ているか。
 - ⑤ ほんとの付き合い、本との出会い、本を手にしたときの喜びなど、本に対する読み手の心がにじみ出ているか。
 - ⑥ 読書生活が日常の中に溶けこんで、自然な姿で読書しているか。
 - ⑦ 文体や語彙を工夫しているか。
- 本の選択に無理はないか。
- 応募規定に合っているか。

審査の方法

- 一 事務局で作品規定に従い整理。応募票は切り離し、作品に学年・対象図書別に通し番号を記す。学校名や氏名は審査段階で明らかにしない。
- 二 第一次審査により、第二次審査対象作品を選考。その選考にあたっては、一作品二名以上の審査員により評価し、競技の上決定する。
- 三 第二次審査では、佳作以上の街頭作品を小学校・中学校・高等学校別に審査。担当審査員の協議の上、決定する。

札幌市長賞

ある晴れた夏の朝に届くように

向陵中学校 三年 渡邊 光麗

——私にはずっと目を背けてきたことがあった。それは『戦争』だ。いつか向き合わなくてはいけないのだと頭では分かっていた。でも恐ろしかった。テレビの特集番組、関係する書物、社会の資料集からさえも、“怖い”ただその一心で目を閉じ、そして耳をふさぎ続けてきた。

「新元号になる前に、おじいちゃんのお墓参りに行くからね。その時ぜひ光麗、原爆資料館を見てほしいの。」

一瞬頭の中が真っ白になった。母は以前から戦争の話題がでると必ずといっていいほど、私達姉弟に語って聞かせる節があった。今回も旅路に乗じて連れて行くことになっているのか。ただでさえ戦争は避けてきたのに原爆なんて……。かくして私は平成最後の日を長崎で迎えることとなったのだ。

この本の主人公メイは日系アメリカ人である。サマースクールの一環で、メイ含む自らの違つアメリカの高校生八人が広島・長崎に落とされた原爆の是非についてディベートし合う物語だ。戸惑いながらも参加を決めたイベントは彼女の人生を変える大きな出来事となるのだが、私にとってもまたこの本との出会いが自分を変えらる大きなきっかけとなった。

——長崎の飛行機の中で、私は衝撃的な事実を知った。私の祖父は被爆二世だったのだ。どこか他人事のように捉えていた原爆がこんなにも身近な存在だったなんて。私のルーツは長崎につながっていたのだ。

「原爆は必要悪だった」「これは原爆肯定派の根本にある信念だ。『原爆を投下しなければ戦争は終わらず、更に犠牲者が増えたからだ』とノーマンは当然のように言い放つ。『祖先は日本人であっても自分にとって日本は外国だから』と冷静にケンはず。『南京虐殺の際被爆者達も日本国内で拍手喝采し続けていたからだ』とエミリアは涙ながらに訴える。そして『日本はナチス・ドイツの同盟国だったから』と語気を荒げるナオミ。世界で唯一の被爆国である日本は同情されこそすれ、必要悪とまで非難されるとは夢にも思わなかった。

私は原爆資料館で当時の凄惨さを目の当たりにした。そして被爆しながらも生き残った人々が歩んできた苦難の人生も垣間見えた。被爆国である日本では被害を受けた、結果、は大々的に発信するが、被害に至るまでの「経緯」を目を向けさせ

ようとはしない。だから私も初めは原爆肯定派の辛らつな意見に違和感を覚えた。けれど彼らの主張を冷静に受けとめた時、私は気づいたのだ。兵器こそ違えど、敵国から受けた甚大な被害に変わりはないのだ。だからこそ怒りや憤りは連鎖し、私が原爆を肯定できないように、彼らもまた原爆を否定できないのである。

——軍艦島を臨む高台に祖父のお墓はあった。戦争という負の歴史から目を背けてばかりの孫を悲しんだのか、大雨の中のお墓参りであった。被爆四世、そんな言葉があるのなら私はそれにあたるのか。何となく心にもやががかったまま、原爆資料館へと向かった。

『戦争だけは、一度と繰り返し返してはいけないんだよ』母が唐突に、けれどしっかりと私に向けて言った。それは幼い頃曾祖母が母に残した魂の叫びだった。戦時下を生き抜いた者だけが語れる生の声を私は受け継いだのだ。奇しくも、世界中から届いたあふれんばかりの平和を祈る千羽鶴の前で。

物語のエンディング、メイは自身の最後のスピーチで広島にある慰霊碑に刻まれた文章について語る。『過ちは繰り返しませぬから……』ここでいう過ちは日本人の過ちでもなく、アメリカ人の過ちでもない。我々人類の過ちであるのです。『彼女の発する言葉一つ一つが私の胸に突き刺さった。我々人類の過ちを繰り返さない』と誓っているのに、その過ちを恐れ、知ろうとすらしない私はまさに過ちそのものではないのだろうか。

そしてメイはフストをこつ締めくくる。

「この討論会はきょうで終わりますが、わたしの平和の創造は、きょうから始まります。」その言葉は霧のたち込めた私の心に爽やかな風を吹きこませた。過去に目を背けていた私は、もう終わりにしよう。真実から目を反らさずに、真っ直ぐ前を向こう。

戦後七四年が経ち、あの頃を生き抜いてきた人は極わずかとなっている。ところが、今まで重く口を閉ざしてきた戦争体験者達が、自ら語り部となって全国を行脚しているという。また数年前から国主体で語り部の育成事業も始められている。

今、中学三年生の私にできることは何だろうか。事実を忘れずにいること、他国では未だに紛争が続いていて決して平和ではないと認識すること、そして目を開き、耳を傾け、自分の言葉で伝えていくことではないのだろうか。長崎での経験、曾祖母から受け継いだ言葉、この本との出会い、全てを原動力にして。ある晴れた夏の朝に届くように。

札幌市議会議長賞

『女の一生』を読んで、伊藤を通じて感じたこと

札幌聖心女子学院高等学校 二年 児玉 優子

秋の深まる気配を感じる夕暮れどき、私は紅葉の下に佇むマリア像に手を合わせ、祈り、想いを巡らせる。日々の感謝や自らの弱さをひそかに打ち明けながら。

厳しいキリスト教禁教令が敷かれた長崎で、なおも異教を信じ続ける物売りの少年清吉にキクは恋をする。しかし、清吉は大勢の同じ信者とともに津和野へ送られ、拷問を受ける日々を過ごすことになる。ここでは、役人が人間とは思えぬ行動で人々に棄教を迫った。耐えきれずに棄教した者も多々いたが、それでも信仰を守り続けた多くの信者が命を落とした。この拷問を積極的に行っていったのが、伊藤という男である。役人という権威に身を委ね、更なる拷問を考へ出しては手を下すのだが、その場を離れば急に大人しくなり、上司に媚を売るその姿は、私の目には気弱で卑怯な男として映った。

清吉を助けたい一心で、キクは妓楼で働き始める。この場所で、キクは伊藤に出会う。彼女は言われるままに客の相手をし、借金までして大金を用意し、伊藤に手渡す。愛する人のために堕ちてゆくキクを前に酒を飲み、遂にはキクの体まで奪った伊藤に対し、私は怒りしか感じる事ができなかった。

愛する人のために苦しみ、命を削り、行くあてもなく彷徨ったキクが辿り着いた先は、聖母マリアのいる南蛮寺であった。自分の体は汚れきってしまったと涙ながらに訴えると、キクの命は尽きる。この様子を見ていた聖母マリアは、キクのために涙を流す。人々を愛し、苦しみから救い、愛を与えるために生きた聖母の子イエスとキクの姿が、彼女には重なって見えたのかもしれない。

近代の幕が明け、キリスト教徒迫害が外交の足かせとなり始めた時、清吉たちはようやく解放される。長く苦しい拷問に耐え、彼らは信仰を守り続けたのである。

数十年後、清吉は彼のもとに届いた一通の手紙に促されるようにしてあの津和野へ向かう。その手紙がなければ、辛い日々が刻まれた追憶の地を、清吉が自ら訪ねることは決して無かったであろう。駅のホームで清吉に近づいてきた老人は、伊藤だった。津和野の地で、かつての加害者と被害者が肩を並べ、切支丹が閉じ込められていた寺へと続く坂道を登っていく情景は、私の心に痛みを伴って現れた。加害者である伊藤が感じた痛みと、被害者である清吉が感じた痛みは違っただろう。実際に拷問にかけられ、棄教を迫られ、仲間が殉教してゆくのを目の当たりにした清吉の心

の傷や痛みは計り知れない。しかし、津和野に来てくれと清吉に手紙を送った時、伊藤はどのような感情を抱いていたのだろうか。切支丹を痛めつけていた地を再び訪れ、あの寺を見た時、伊藤の心には血が流れていたであろう。そして初めは伊藤という人物を卑劣な人間としてしか見ていなかった私自身、伊藤が感じていたであろうものと同じような痛みを感じた。自分の弱さを他人に知られたくないあまり、虚勢を張ってしまう。他人が自分より評価されていると思うあまり、自分の中でどんどん卑屈になっていってしまう。このようなことを、日常の中で感じることもある。そしてそれを感じる度に自身の中に沸き起こる自己嫌悪。自分を嫌いになり、誰かを羨み、羨んでいるながらもなぜか心の中で蔑んでしまう弱い自分がいると感じているからこそ、私は伊藤に似た痛みを伴って津和野の情景を想い浮かべたのだと思う。

真冬に信者たちが拷問された責苦の池で、伊藤は清吉に向かい、犯した過ちを謝罪し始める。自分でも分からぬうちに他人を傷つけ、自分も深い傷を負うことを繰り返してしまふ伊藤の気持ち、私には理解できる気がした。自分の弱さに耐えられず、何もかも投げ出したくなる感情を持つことがある。私と伊藤との違いは、その感情を持った時、自分以外の誰かを本当に傷つけてしまふか否かという、それだけであろう。

人は誰しも、弱さを持っている。注目を浴びたくて背伸びしたり、それが報われずにいらだちを覚えることもある。卑怯な人間にも見えた伊藤だが、彼は自分が過ちを犯す度けたくなることもある。卑怯な人間にも見えた伊藤だが、彼は自分が過ちを犯す度に深く反省し、再出発を誓う。キリスト教徒となり、神に許しを請うその姿を、私はマリア像に祈りを捧げるといつも思いつく。伊藤の弱さに触れ、彼の傍らに立った清吉の肩に、そしてうずくまる伊藤の肩にはトンボがとまる。一人の上で羽を休めるトンボは、その影を見つめながら祈っていたのかもしれない。気がつく、私の肩にもトンボが止まっていた。自分や他人の弱さを認め、祈りのうちに生きていくことが私に出来るだろうか。私は自身に問い続ける。私の上で休息したトンボは、夕空へ飛び去っていった。私の問いをその羽に乗せて、行く先は私には分からないけれど。

札幌市学校図書館協議会会長賞

心をさがそう

白楊小学校 二年 川上 慶悟

心は、どこにあるのかもわからないし、どんなにさがしても見えない。

だけど、「アノのはっぴょう会できんちょうしたとき、かけっこでーとーとーとーとれしかったとき、九九がわからなくてこまったとき、ぼくのどこかに心があるなってわかる。

ぶたははなに、ウサギは耳に、犬はしっぽに、たぬきはおなかに、心があるらしい。

心はなみだの中にあると書いてあるけど、ぼくはちがうと思う。なみだはながれてなくなってしまうから。声の中にあると書いてあるけど、それもちがうと思う。声も口から出ていってしまうから。

ぼくは心がみんなのむねにあると思うんだけど、一人一人ちがう場所にあるのかもしれない。

みんなってというのは、生きている人間とどうぶつと虫。花と草には心があるかどうかわからない。でも、本当はあるかもしれない。

心がない人は、ゆうれいかもしれない。心がなくなったら何もかんじない。だから心はいのちかもしれない。心といのちは同じ三文字だし、つながっていると思う。

うんどう会のとぎに、先生が「心を一つにしてがんばりましょう。」と言っていたけど、どうすればみんなの心が一つになるのかな。みんなで力を合わせたら一つになるのかな。それともみんなで同じことを

考えたら一つになるのかな。

心は見えないから一つになったかどうか、かくにんするのはすくなくむずかしい。

でも、おまつりのくじびきでやきゅうのチケットが当たった人を見たときうれいのがわかったし、おねえちゃんがバスケのれんしゅうで、かんたんにおこられてしょんぼりしているのもわかったし、心は見えないけれどわかっちゃう。ふしぎだと思う。

心はむねから体ぜんたいに広がるのかもしれない。月やうちゅうまで広がっているのかもしれない。

心は見えないのに、とてもおもしろい。

札幌市学校図書館協議会会長賞

チャーリーが教えてくれたこと

北嶺中学校 三年 玉田 光

僕はこの「アルジャーノンに花束を」という本に小学四年生の時にすでに出会っていたが、当時の僕には外国人の書いた本はどこか近寄りがたく、敬遠して手を出さないまま四年も年月が過ぎてしまった。

しかし、担任の先生が今回読書感想文にと勧められた本の中に偶然この本を見つけ、きっと何か縁があるのだろうかと思いついてこの本を題材にすることにした。

この本の主人公は知的障害のある三十二歳のチャーリー・ゴードンで、本文は知能を高めるための手術を受けたチャーリーの「経過報告」という形で綴られる。この経過報告は当初、助詞や句読点も上手く使えていない拙いものだったが、それが徐々に高度で知的なものに変化していく。アルジャーノンは、すでに同じ手術を受け知能が飛躍的に向上した白鼠で、チャーリーは知能を測るテストでアルジャーノンと競い合う。初めは全く勝つことのできなかつたチャーリーだが、それがだんだんと勝てるようになり、最後には常人を遙かに超える天才的な知能を手に入れることになる。だが、彼の内面は幼いままでも知能の急激な発達についてこられず、彼の精神状態は極めて不安定なものになってしまう。次第にチャーリーは周囲を見下すようになり、知能は低くても手術前には確かにいた友人はいなくなってしまう。しかし、人工的に誘発された知能はいずれ衰えてしまうことが明らかになると、チャーリーは知能が衰える前に周囲を見下すのではなく理解したいと望むようになり、最後には他者への思いやりや寛容さを取り戻して穏やかに知性を失っていった。

「どこかついでがあつたらうらにはアルジャーノンのおはかに花束をそなえてなてくたさい。」本を締めくくるこの一文は、チャーリーが他者への寛容さを取り戻したことを象徴し、本の題名を強烈に印象付けている。この、一文と題名というごく短い一節に込められた作者のメッセージの大きさや重みは、僕に鳥肌を立てるには十分すぎた。

この作品の主題、すなわち作者のメッセージの一つが「他者への寛容さ」であるのは間違いないだろう。では、寛容さとは何なのか。この作品を読む前の僕は、それを他者の短所や間違いを咎めず受け入れることだと考えていたし、多くの人はそう考えると思う。しかしそれは本当に正しいのだろうか。

チャーリーが母ローズと妹のノーマにためらいながらも再会した場面では、自分を腫れ物扱いし家から追い出しまで一人を許し、再会を喜び合っていた。これは、間違い無く彼の取り戻した寛容さが現れた場面だろう。しかし、もし失敗を咎め立てず許すことが寛容さなら、なぜわざわざ二人を訪ねたのだろうか。再会自体が目的なら、二人に会うのをためらわないはずだ。それは、チャーリーが二人のことを理解したいと望んだからだ。チャーリーは、この時すでに知能の減退のことを知っており、前述したとおり周囲の人間を理解しようとした。そして、その周囲の人間には離れ離れになった家族も含まれていたのだ。なぜこういうことをしたのだろう、このことについてどう感じるのだろうか、そういった相手を知ろうとする姿勢が寛容さを生むのではないだろうか。二人に対する寛容さも初めからあつた訳ではなく、二人の価値観や境遇を知りある種の哀れみを持ったからこそ生まれたものなのだ。

そこで、僕は果たして寛容さを持っているのだろうかと思つた。普段から仲の良い友人ならば、多少変なところがあつても自然に受け入れ笑いに変わることもできる。しかし、それがよく知らない人、況してや赤の他人ともなると、おそらく僕は「この人はこういう人だから仕方がない」といつて「我慢」するだろう。しかし、これは寛容さを持っているのではなく、理解しようともせずに突き放して見捨てているのだけなのだ。

思い返せば、今僕が特に親しくしている友人の多くに当てはまるのだが、入学当初は目についていた冗談でしているふざけた言動などが、一度話してみると面白く感じるようになり、今はその人の個性や魅力に感じられている。言動自体は何も変わっていないのに、彼らを知る前と後とでは僕の受け取り方はまるで違つものになっているのだ。

僕は、この本に本当の意味での寛容さについて考えさせられた。よく知らないものに触れるのは、自分も怪我をすまつかもしれない勇気のいることだ。しかし、いざ触れてみると案外それは暖かく優しいものかもしれない。今はまだ苦手意識のある人でも、その人のことを知ればきつと親しくなれると思うようになった。相手のことを知り、自分のことも知つてもうえれば、僕の学校生活は、そして人生はとても楽しく充実したものになるだろう。この本と、この本に出会わせてくれた縁に心から感謝をしたい。

「アルジャーノンに花束を」

ダニエル・キイス著

早川書房

札幌市学校図書館協議会会長賞

私の救世主

札幌光星高等学校 一年 加藤 萌香

私は図書部に入るほど本が好きで、実際多くの本を読みます。しかし、同じ本を何度も読む、ということはあまりありません。一度読んだ本の内容は大体覚えていてるので、知っている物語を繰り返し読むよりも、知らない物語を読みたい、と思うからです。そんな私がもう何度も読んでいたシリーズ、それが「妖怪アパートの幽雅な日常」です。

この作品の主人公は、中学生の時に両親を亡くし、親戚の家に預けられて育つうちに、自分の世界を閉じてしまっています。私の両親は健在で、今も同じ家で一緒に暮らしていますが、このシリーズに初めて出会った中学二年生のとき、私の世界も小さく閉じていました。

小学生の頃から、周りの人より少し勉強が出来た私は周りから期待され、中学校入学と同時に有名な塾に合格して入塾しました。道内のトップ高校合格に向けて中学一年生の時から勉強していましたが、周りとのレベルの違いや、授業内容の難しさに苦しみました。そしていつしか自分を酷く卑下するようになってしまい、自暴自棄になったのが、中学二年生の時です。その頃この本に出会っていませんでしたが、今の私はいなかったかもしれません。

中学校の図書室でふと見つけて借りて読んだのですが、一冊目を読んだ後、一つの名言が頭の中に残っていました。アパートの住人の一人が主人公に言った、「君の人生は長く、世界は果てしなく広い。肩の力を抜いていこう」という言葉です。私は何に悩んでいたんだろう。その時の私はそう思っていました。主人公は最初、自分の世話をしてくれていた親戚は自分のことを邪魔に思っている、と思い込んでいました。勝手に思い込み、親戚の家での自分の居場所を自分から狭くしていったのです。考えてみれば、私も思い込んでいました。塾の人や学校の先生は私のことを馬鹿にして笑っているのではないか、両親は私のことを恥ずかしい子どもだと呆れているに違いない……など。しかし、実際笑っている姿を見たことがありませんでした。両親が私を見限っていると感じる言動もありませんでした。この本は、そのことを私に気付かせてくれた、私の救世主とも言える作品です。

シリーズが進んでいくうちに、主人公は様々な経験をしながら、本当の友達や、頼れる存在を得ます。私は、自分を信じられなくなるあまり、そんな自分と関わって

れていた人たちすらあまり信じられなくなっていました。しかし、明らかに性格が暗くなった私とずっと友達でいてくれる存在こそ、私にとって本当の友達だと気付きました。そして、その人たちを信じるようになって、少しずつ自分を信じられるようにもなりました。性格もその明るさに戻っていき、そのおかげで友達も増えてきました。苦手だと思っていた人が、実はとても面白い人だった、ということも何度もありました。友達、というのは本当に大切なんだ、ということにも気付きました。

アパートに住み始めて自分の世界が広がった主人公は、あるクラスメイトと仲良くなります。しかし、彼はいつの間にか転落していくのです。悪い仲間ができ、未成年で飲酒や喫煙を始め、最後は覚せい剤に手を出して逮捕されます。人間関係や不安が彼をそうさせたのです。当時の私は、まさしく同じようなことが原因で悩んでいました。もしもあのままだったら、このクラスメイトのように法を犯したかとはともかく、酷い状態になっていかもかもしれません。ずっと支えてくれていた友達や家族を自ら拒絶し、本当に自分の殻にこもっていたら、きっとこの作品を読んでも、何も響かなかったと思います。

高校に入ってからまた読んだとき、また私の中にあつたわだかまりが一つなくなりました。主人公は、自分と違う視点を持つ人と話すのが楽しいと親友に話します。その時親友は、「色々な価値観を比べてこそ自分の価値観が分かる」ということを言います。新しい環境の中で浮かないようにと気を遣うあまり、周りに同調してばかりでした。しかし、自分の意見を言ってみると、案外浮かず、話が盛り上がりました。他の人の様々な意見を聞いて、より自分の考えが深まることもよくあります。

このシリーズは、閉じかけていた私の世界を開き、今でも何か辛いことがあったときに読むと、私を助けてくれます。シリーズを通して主人公は大きく変わっていくのですが、主人公と同じくらい、私も変わることができました。今回引用した場面は、全てシリーズ第一作目のものです。他の作品にもたくさん名場面とたくさん人の名言があつて、それらも私を何回も救ってくれました。きっと、私はこの先も幾度となく心が折れたり、どっしりようもない不安を抱えることがあると思います。そして、その度にこのシリーズを読んで助けられるでしょう。「妖怪アパートの幽雅な日常」に出会えて、本当に良かったです。

札幌市PTA協議会会長賞

命の差別

栄北小学校 五年 横山 英伶

初めてこの本を手にした時に、「オーガストはふつうの男の子。ただし顔以外は。」という不思議な題名に心を動かされた。

オーガストはふつうの人間と同じことをする。アイスクリームを食べる。自転車に乗る。ボール投げをする。ゲーム機を持っている。このすべてをふくめてふつうの子。しかも、ふつうの感情がある。オーガストには愛情をたくさん注いでくれる家族がいる。お父さん、お母さん、犬、そしてオーガスト（あだ名でオギー）で幸せにくらしていた。オギーは五年生で初めての学校へ行った。学校へ行くと、大きな大さわり。そこらじゅうでキャーキャーわめきが聞こえてくる。先生（トウシユマン先生）がある三人を学校見学ツアーにオーガストといっしょに行かせた。シャーロット、ジユリアン、ジャック・ウィン。見学ツアーを終え、学校行くことになったオーガスト。オーガストはかげ口でネズミ少年、奇形・怪物、ホラー映画に出てくるフレディ・クルーガーなどと呼ばれていた。しかし、オーガストの明るい人がらに、周りの同級生たちが、だんだんと心をひらいていくというストーリーだ。

二〇一六年七月。十九人も尊い命をつばい、二十六人に重軽傷を負わせた事件が起きた。加害者は「障害者が生きているのはじやまだ。」と言って犯行に及んだ。私の親せきにも、出産時に母体の命とひきかえに、仮死状態で生まれ、重度の障害を持つて産まれた方がいる。彼は、ふだんは、東京のしせつで生活している。夏休みの間だけ、私の祖父のお寺の実家へ帰って来る。おぼんのお墓参りに毎年会うのだ。彼是人からの質問に答えることができる。「あーあ。」「うーう。」「と返事をし、彼をみんな理解している。表情がつくれなため、笑った顔も怒った顔も泣いた顔も

見たことがない。人との会話が出来ないが、お寺で飼っている二匹の猫を優しくなでているのを見た事がある。彼はオーガストと同じふつうの人間の感情を持っている。なので殺傷事件は私達家族にとってもショックな事件だった。

障害があっても、世界にたった一つだけの命だから。相手を傷つけては絶対にだめだと思つ。この事件の遺族の方々は「死んでも仕方のない命。」「生まれてこない方が幸せな命。」「障害あるなしに限らず今もこの社会のどこかで命に線が引かれてい。」「とおっしゃっている。」「障害者だから。」「と、差別。でも誰の助けや支えがなくても生きている人なんているのだから。オーガストも私のしんせきも家族に守られて生きている。私もそうだ。家族、先生、友達。沢山の人に支えられながら生きている。誰をも排除しない社会。それはきれいじこかもしれない。

でも私は「変わらない。」「とあきらめずに、「きれいじこ」を目指すことから一歩が始まると感じている。私は差別のない社会を目指して生きていきたい。

「ワンダー」 R・J・パラシオ著 ほるぷ出版

札幌市PTA協議会会長賞

『ある晴れた夏の朝』と動かされた心

向陵中学校 二年 増田 美玖

私は読書が好きだ。ジャンルは問わずたくさんの本を今までに読んだ。しかし、戦争に關する本だけはこれまでに敢えて読まないようにしてきた。

幼い頃、『かわいそうなぞう』という絵本を読み、号泣したことがある。そのとき、戦争のために殺されてしまう象があまりにも可哀想で、涙が止まらなくなったことを今でも覚えている。その後も『ガラスのつさぎ』や『火垂るの墓』など、戦争をテーマにした本を読んだが、やはり悲しい気持ちを引きずってしまう。それ以来、なんとなく避けていたのかもしれない。

だがこの本は、広島と長崎に落とされた原爆の是非をアメリカの高校生がディベートする物語だと知って興味を湧いた。なぜなら、原爆投下に善が存在するなど思ってもよらなかったからだ。原爆はアメリカが犯した罪だと思っていた私は、原爆は必要だったと考える人がいることに強い衝撃を受けた。

主人公メイは日本人の母とアメリカ人の父をもつ高校生。人前で話すことが苦手だが、先輩に誘われ公開討論会に否定派の一員として参加することになった。他のメンバーもアイルランド系・中国系・ユダヤ系・アフリカ系・など多人数。「戦争と平和」というテーマで原爆肯定派と否定派に分かれ議論していく。討論が進むにつれ原爆だけでなく、南京虐殺、人種差別、ユダヤ人虐殺など、様々な問題についても議論が繰り広げられる。

原爆否定派の意見はどれも納得できるものばかりだった。もちろん私も否定派だ。一発の原爆が何百万人も罪のない市民の命を奪い、生き残った人々の人生も変えてしまったこと。原爆が人体実験だったのではないかということ。これらの話は周りの大人たちからも聞き、知っていた。だから私は否定派の意見に共感した。

しかし肯定派の意見も無視はできない。南京虐殺には大きなショックを受けた。本心に日本人がそんなことをしたのだろうか。日本人でありながら知らないことも多くあった。ひどいことをしたのはアメリカだけではないという意見も理解できない。でもない。

さらに肯定派は、戦争が続けば多くの犠牲者が出る、原爆投下は戦争を終わらせたくさんの命を救ったのだから必要だったと主張した。立場が違えばこういった考え方も筋が通ってしまうのだと感じた。

広島平和記念公園に設置された慰霊碑に刻まれた「安らかに眠って下さい過ちは繰り返しませんから」という言葉。日本人なら犠牲者は人類全体、過ちは世の中の戦争を指し、そして全世界の平和を願っていると理解できるだろう。しかし肯定派は、日本人が自ら自分達の過ちを認め反省していると解釈した。日本人の、慰霊碑に込められた平和への願いが全く伝わっていないのだと驚愕した。言葉の捉え方まで違つたのだ。

先日、私は信じられないニュースを目にした。アメリカには原爆のきのこ雲を「戦争を終わらせた誇り」としてロゴマークに使っている高校があるというのだ。留学していた日本の高校生が異を唱えた動画が拡散され、大きな反響を呼んだというニュースだった。日本側の意見を知る機会がなかった、知らなかったという反応が多かった。その一方で、それでも戦争を終わらせたという肯定論もあったそうだ。

日本では、アメリカの行いは間違っていたと習つてもアメリカでは、正しい判断をしたと教えられる。このように育った環境や教育の違いがあるから、日米の原爆の認識が異なるのではないか。自国の情報だけでは本質がわからず、偏った考えになり自国に加担しがちになる。これは原爆の話に限ったことではない。日常においても、一つの考えに縛られるのではなく、様々な意見や判断材料が必要だ。そうすることで物事の新たな一面が見えてくると思う。

私は、肯定派の理解をなかなか得ることができない展開にやきもきしていたが、ラストは曇っていた気持ちが一気に晴れた。討論会の締めくくりで肯定派は、原爆は間違いであったと述べたのだ。その背景には否定派の主張の他に、一冊の本があった。本に導かれ動かされた心は、人をも変えていく。

物語を読み終える頃には、私の考えにも大きな変化があった。今までのように悲しいできごとから目を背けず、しっかりと向き合っていくと思えるようになった。戦争を体験していない私たちだからこそ、戦争についてもっと知り記憶に残していくなべきだと思う。

そして、自信を持って自分の言葉で語れるようになった。過去から学び、私たちが未来に伝えなければいけないのだ。

個人を認め合い共存することのできる、平和な世界を願つて。

「ある晴れた夏の朝」 小手鞠るい・著 借成社

札幌市PTA協議会会長賞

真の優しさ、真の幸せとは―「こんなにも優しい世界の終わり方」を読んで―

札幌旭丘高等学校 一年 岩見 美結

「いつやら世界は本当に終わりを迎えるのかな。」

ものすごく突飛な始まり方をするこの物語。この世の終わりなど、考えたことがあるだろうか。「世界の終わり」と聞くと、とても恐ろしく、苦し、痛みも伴うイメージだ。だが、この物語は違う。世界を終わらせる原因は、戦争でも病でもなく、空から降り注ぐ青い光によって、全てのものが凍りついたように時を止めるというのだ。どうやってもいずれ世界は青く閉ざされ、そこで生きるもの全て停止して終わってしまう。これは防ぎようがなく、反抗の余地もない。もしも明日世界が終わるとしたら、私はいったいどうするのだろうか。きっと、騒然とした世界で、何かするわけでもなく、ただただ恐怖にかられながら、最後のときを待つだろう。しかし、この物語の登場人物たちは一切混乱することなく、世界が終わわり、自分の存在がなくなることも受け入れて、愛する人のもとへ一目散に駆け出して行く。

物語は、主人公の優という男性と優が愛した雪乃という一人の女性の関係性を軸に展開する。二人が出会ったのは、まだ十四歳のときのことだった。優はとも臆病で、慎重な性格である上、どこか人とは違って、優と雪乃は、互いに想い合っているのに、優しすぎるあまり、ずっと関係を前に進める一歩を踏み出せずにいた。そして二人は「別れ」という大きな過ちを犯す。だが、世界が終わりを迎えるその時になって、ようやく本当の想いに正直に行動する。彼女と共に居たいという望み以外は不要だったと気づいたのだ。優は雪乃に会いに旅に出る。彼女が住む町までは直線距離で五百キロ。その旅の最中、様々な人と出会う。恋人同士、夫婦、親子に友。それぞれにそれぞれの愛の形があった。一人一人終わりは異なるが、皆幸せそうだった。その世界はすくなく優しい。不思議なほど穏やかで、限りなく親切だ。みんな誰かを愛したがつている。一生懸命自分の愛に正直になろうとしている。ものの価値はいつかなくなってしまうかもしれないが、人を愛する気持ちは時が経っても決して消えはしない。人と人との繋がりが薄れてきている現代の中でこんなにも深く描かれた愛はとても美しく感じた。「世界の終わり」という悲しさの中からも、優しさが溢れ出していたのだ。見えるものはたかが知れている。有限でいつかは消えてなくなる。けれど、見えないものには一果ても終わりのないのだ。

優は旅の終盤、心の中でこんなことを思う。

「一滴の雫が水面に波紋を生むように、ほんのひとりの言葉がひとりの心を優しい色に染めていく。」と。

物語の登場人物たちはどんなに辛く苦しんでも、いつだってオブラートに包まれた優しい言葉で満ちていた。そこで私は、言葉は良くも悪くも強い力をもっていることを痛感した。だって言葉は「人類が手に入れた最強の武器」なのだから。その武器を決して悪い方向には使って欲しくない。汚い言葉で溢れている現代社会では、気づかないうちに言葉の暴力で相手を傷つけてしまうことも少なくない。面と向かって人と話す機会が減ってきている今だからこそ、改めて言葉というものについて深く考えさせられた。また、優が放った、

「何からは誰かを殴るための拳を持って生まれてはこなかった。この手は、大事なひとの背中をさすったり、美味しいものを食べたり、美しいものをつくったりするためにある。」

というセリフがとても胸に刺さった。これはどんなことに対しても言えることだ。どんな便利な時代へとなっていくにつれ、つい物事の本来の役目を見失ってないだろうか。そう自問自答させられた。

この物語を読んで、私は、人生において大切なことは、長さよりも「密度」なのだと感じた。戦争がなく、誰かにある日突然、襲われる心配も全く言っていないほどな日本で生まれ、生きている以上、明日が来ないかもしれないと考えながら生きている人はそうそういない。明日、私たちが生きている保証なんてどこにもないのに。明日やればいい。明日がある。一日の中でそう思う時は何度あるだろうか。時間が有限であることを忘れて浪費していかうちに取り返しがつかなくなることは決して他人事ではない。だが、やはり人間は当事者にならないとその事には気付けない。人は、終わりがあるとはつきり実感したときに初めて、正直になれる。誰だって残された時間はそう長くはない。だから惜しんでいる暇なんてない。ひねくれたり、憎んだら駆け引きしたり、そんなことをしている間にも時間はどんどん過ぎていく。今、この瞬間に世界が終わったとしてもかまわない、そう言い切れるまで、私たちは走り続けなければならぬ。

人生の在り方を学ばせてくれた本だった。

「こんなにも優しい、世界の終わり方」 市川 拓司・著 小学館

北海道高等学校PTA連合会石狩支部長賞

平和をつくるコミュニケーション

札幌聖心女子学院高等学校 二年 豊嶋 紅安

私はこの夏、カンボジアへ体験学習に行き、教育を十分に受けられない子供たちと交流したり、現地の学校を作った方のお話を聞いたりした直後だったので、この本にとっても興味を持ち、読みました。

筆者は、鍼灸師として渡米した後、知人のネパール人に誘われて軽い気持ちでネパールへ渡ります。ネパールに渡り、徐々に身分制度や女性蔑視の現状を知っていた筆者は、貧しい人に無料で鍼の治療を始めます。そしてある時、誘われて参加した医療キャンプでたくさんの子供が病気で亡くなっていく現状に衝撃を受け、ネパールの貧困に苦しむ人々の就学支援を始めます。さらにネパールで小学校の建設を志し、資金や現地の人々との関わり方の難しさなど様々な問題に直面しながらも、三年後に「クワーク記念「マラヤ小学校」を開校します。現在は学校運営を現地の人に任せ、サポーターとなり国内で活動しています。

筆者はネパールで戸惑いを感じていた中で鍼灸を行うことで感謝され、人の役に立ち続けたいと強く感じます。その後、筆者が就学支援に携わっていた際、現地の校長先生に、「子供たちは何でもやってくれる大人を求めています。子供でも努力すればできるようになると信じませんか。」と言われ、同情して「人を育てる」ことを忘れていたと気づきハッとしましたという場面があります。私も弱い立場の人を助けなければならぬ人、と見てしまうことがあります。しかし、人は誰も人の役に立ち、人に必要とされたいという思いを持っていると知りました。

また、話の中で特に印象に残ったのが、支援活動の難しさは「どこまで踏み込むか」であり、家庭問題の座視も危険だ。という話です。この文章を読み、カンボジアに訪れた際、遺跡修復に関わる日本人の方が、足が壊死していた部下に手術代を出すか迷ったが、手術代を出すことは国の医療への意識を遠ざけることになりかねないと考え、出さなかつたという話を思い出しました。支援が相手やその家族、国にとって成長を妨げることかどつつかといつつと今すぐ支援が必要な人に支援することのバランスをとるのは難しいと感じました。

そして、筆者自身の発病に加え現地での地震の影響で帰国し、日本で活動しているうちにネパールで現場復帰をしたいという気持ちで沸き起こった筆者に対し、支援していた団体の方から、現地の人に任せ彼らの自立を推し進めるべきというアド

バイスが送られます。それにより筆者は現地の人が運営できる学校を目指していたが、自分がいないと成り立たないと身勝手に思い込んで自身が彼らの自立を阻害していたと気づく、というエピソードには深く考えさせられました。今の私は筆者のように学校を建てる、という大きな決断をして努力し続けることは決まてできませんが、もし私が実際に筆者の立場だったら現地の人々に任せて離れることは不安だと思えます。また、現地に戻らないと決める勇気は持てない可能性が高いと思えます。だからこそ、アドバイスにより自分自身を客観的に捉え運営から離れた筆者は、本当に強い人だと思えます。そして、ネパールの人々を自立させ向上心を持たせることができたため、最後の最後まで素晴らしい支援者だったと思えます。私は現地の人に任せたいことも支援の一つの形だと思えます。

この本では度々、支援をどこまでするかが話題となっています。私は、支援において相手を信じ、周りの意見を聞くことが良い判断をするために重要だと思えました。これは身近な関係においても互いを成長させる良き人間関係を築くためには大切なことだと思えます。

最後に「外に出なければ出会えないことがたくさんあるはずだ。」というエピソードから、その土地に出かけその土地の人と関わらなければ相手を正しく知ることはできないと強く思いました。これは差別、偏見問題にも言えると思えます。相手を知ろうとせず、勝手に決めつけるのではなく、直接対話し、相手を信じてお互いに向上するチャンスをつぶさないことが大切ではないでしょうか。私はこの夏、カンボジアを訪れ、世界への関心を持つことができたため、改めて現地へ行ったこと、関わりを持てたことに感謝したいです。何度も海外へ出かけていくのは難しいけれど、訪れる際には相手の話に耳を傾けたいと思えます。また、二〇二〇年の東京オリンピックに向け日本に来られる他国の方と話してみたり、ソーシャルメディアで交流したりして、多くの考えに触れることから始めたいと思えます。

私は、平和をつくる第一歩目は、どこの国の人だからなどと先入観を持たず相手の良いところを認めること、そして対等に関わり成長することだと考えます。

「マラヤに学校をつくる

〜カネなしコネなしの僕と、見捨てられた子どもたちの挑戦〜

吉岡 大祐・著 旬報社

光陽社賞

のろいアメはまほつのアメ

大谷地小学校 二年 豊沢 峰々

のろいアメは、食べたらずいせいでしょ。でもおそろいアメです。でも、のろいアメのひみつを知ってはいくつ、この本が大好きになりました。

はじめ、弟のことを思いました。サキとお姉ちゃんのお話だからです。わたしの家でケンカは毎日です。でもほんじつがあつても弟のことばでいたいikiraitiはなりません。家族といつきずながあるからです。

サキはお姉ちゃんにのろいアメを作ろうと悪口を十こ考えます。考えているうちに大切な家族を思う気持ちに気がつきます。サキはお姉ちゃんにのろいアメのひみつを話します。「悪口は頭にきても、サキのことはきらいにはならないんだ。」とお姉ちゃんはやさしい顔で答えます。わたしはこの場面が大好きで、むねが温かくなりました。

実は、わたしものろいアメを作りたいと思ったことがあります。それは学校で友だちとケンカになった時です。「大きい」「言われました。わたしも大きいと思いました。学校に行くのもいやで休んだこともあります。先生やお母さんとたくさん話をして、たくさん考えました。そこで気づいた本当の気持ちは「友だちも学校も大好き。」とこの気持ちになりました。

だれかのことを大きらいと思うと、その気持ちからにげだしたくなるくらい苦しくなります。それは心のおくの本当の気持ちは大好きだからです。人は本当の気持ちと出てくる言葉やたいごちがうごちがあります。きらいの気持ちは本当の気持ちではないと気がつくごち。それがきずなを強くする力ギなのだと思います。きらいと好きを重ねて、人と人はきずなを太くします。わたしと友だちが前より仲よ

しになったように、サキとお姉ちゃんのものろいアメをきつかけ、きつと強くいきずなでむすばれたはずで。

のろいアメ、それは「人と人のつながりを強くする、すてきなまほつのアメ」なのです。

「魔女のものろいアメ」 草野あきこ・作 ひがしちから・絵

PHP研究所

キハラ賞

星を日指して

琴似中学校 二年 野崎 幸子

「地図なんて空から写真を撮影して作るんじゃないの。」と呑気に思っていた自分。去年、自由研究の副賞として伊能図をもらったがさほど興味もなく、一度開いて見たきり本棚の飾りとなっていた。ある日、本屋で見つけたこの本。題名にある「伊能忠敬」の名を目にし、ふと伊能図のことを思い出した私は軽い気持ちで本を手を取っていた。

私は絵を描くのが好きなほうだ。むしろ得意としている。そんな私の夏休みの恒例行事ともいえる自由研究。今まで大きな模造紙に北海道地図を描いたり、近くの三角山を地図から立体に起こし模型を作ったことがある。立体模型の場合、発泡スチロールの板に地図を貼り、細かく複雑な等高線に沿って切り、組み立てるため初めは苦戦し何度も何度もやり直しをした。時間はかかったが慣れば楽しく、大変だとは思わなかった。むしろやりがいを感じられた。この作品はつくば市で展示されることとなり、私にとっても誇れるものとなった。だから彼が作ったただの平面の地図を見ても、特別凄いことだとは思わなかった。この本を読むまでは。

人生五十年の江戸時代に決して体が丈夫ではなかったのにもかかわらず、長生きをし、蝦夷地への測量という一大プロジェクトを任せられた忠敬。五十の手習いという言葉があるが、まさしくその通りだ。至時に弟子入りをし、優秀であったため推歩先生と呼ばれるようになった。おもしろいことに十九歳も年上の弟子、忠敬。年の違いを気にせずに学ぶ姿勢。彼の謙虚な姿を私も見習いたいと思った。隠居後の姿は趣味というより、決して裕福ではない少年時代を過ごした反動があり、自分の好きだった天体観測や測量を熱心に学んでいたように感じる。

読み進めるにつれ、言葉や自然環境が違う蝦夷地に赴き測量をする大変さが分かり、平面であっても地図作りは決して簡単なことではないと感じた。当時、蝦夷地はまだ開拓されてなく、崖のような海岸線に沿って歩くしかない。クマに襲われる可能性だってある。私も北海道に住んでいるが、最近では札幌の住宅地にまでクマが出没し、たびたびニュースで話題となっている。いくら出没した場所が住んでいる所と違っていても、もしクマと出会ったらどうしようかと、と思いつても怖い。武器も少ない昔ならなおさらだ。対処法も知らず、背中を向けて逃げ出した平次を見て危ないと感じてもヒヤヒヤした。自然豊かなこの地では、測量は常に危険と隣り合わせだっ

たのだ。

伊能図に対して初めは特別興味がなかった私だが、測量に対する熱意や勤勉な彼の姿を見て、もう一度地図を見てみることにした。今までは曲がりくねった線だな、としか思わなかったが今では一本一本がものすごい努力によってひかれたものだと考え直した。たった一本の線だが、とてつもない重みを感じ、とても美しい地図に見えた。

この本と出会い忠敬について知ること、今まで見えなかった伊能図の奥深さについて理解を深めることができた。

私の立体模型作りの裏には、忠敬がいたのかもしれない。今までは、私一人で作ってきたものと思っていた。しかし、彼の測量から色々な人々の手によって進化してきた地図が私の立体模型の元となっている。二百年も前だが忠敬の存在が確かにそこにあった。この本を読み終えそのことに気づかされた。先人の功績は私達に知らず知らずのうちに影響を与えている。

私は地図や立体模型を作るのは好きだが将来、地図に関わる仕事をしたいわけではなく、祖父や大祖父のような医者を目指している。祖父は長万部に病院がなかった頃、病院を開いた人だ。歳をとってからだのため、これが理由で体調を崩して亡くなったと聞いている。大祖父は貧しい国の人々のためにとアフリカなどで医療の支援をしている。私は歳をとってから人も助け、利益のために仕事をを行うわけではないという二人の姿に憧れを抱いている。二人の姿は五十五歳から測量を始め、それを決して測量の手段として考えなかった忠敬と似ているように思える。私の中では二人と同じように忠敬も星となり輝き始めた。

私の人生はまだ十四年あまりだ。しかし、彼の生きた時代ではすでに大人扱いされている。現代に生きる自分は自由に学び、厳しい身分制度も無く、順調かと思えば、目標を掲げているわりに思うように結果を出せていない。暗いトンネルの中を彷徨い、抜け出せずにいるのだ。しかしこの本によって、焦らずコツコツと努力をし、真摯に取り組むことが大切だということを教えられた。すぐに結果を出せずとも一歩一歩確実に歩いていけばいつか、トンネルの外の目指していた世界にたどりつけるだろう。

私の中で忠敬や祖父達が星となって輝いているように私もいつかそんな存在になりたい。

教育出版賞

ウィニー、勇気をありがとう

厚別西小学校 四年 坂本 温音

わたしは大きなしよあげきを受けた。『バレエなんて、きらい』と書かれた本があったからだ。わたしはバレエを習っていて、おどろくことが大すきだ。なぜバレエがきらいなのかを早く知りたくて、すべに読み始めた。

わたしが一番印しようにのこつた場面は、三週目の火曜日、ウィニーがヴァネッサとゾーイに、「バレエ教室にもう行かない。」とつ場面だ。一対一の言い合いになつてしまつた時、わたしはむねがしめつけられるよつな気がした。二人はウィニーの意見を聞き入れなかつたからだ。わたしはヴァネッサとゾーイに、「三人は一番の友達でしょ。ウィニーの気持ちもちゃんと考えてあげてよ。」とつ言いたかつた。わたしがウィニーのよつな立場になつたら、どんなにつらかつ悲しかつ、苦しいだらうか。二人はウィニーをせめたが、わたしはウィニーだけが自分勝手なことを言つてゐると思えなかつた。ヴァネッサ達も、自分のことしか考えてゐないと思つた。

わたしは、一人だけがちがつ意見でも、友達にはつきり言つてゐることができるとつかを考えた。女の子同つで意見を言ひ合ひつては、とてもむすかしい。一度、学校で二人の友達に、

「明日の昼休みはグラウンドで遊ぼうつね。」
 と言われ、

「うん、いいよ。楽しみだね。」
 と、思つてもゐないことを言つてしまつた。わたしが学校生活の中で一番楽しんでゐる休み時間。だれとついで何をすることは、とても重要だ。でも、友達にいやな顔をされたり、なか間は、なかつた。本当のことが言えなかつた。友達の反

のつをおそれずに、自分の気持ちを言えるウィニーは大人だし、すついいと思つた。

わたしはこの本を読み進めながら、友達とは何かを深く考えた。ウィニーは、グラ・ン・ジュニアに成功した後、自分はバレエをやめるが、ヴァネッサ達にはつづけてほしい、と言つた。そして、おたがいのちがいを受け入れ、しよに楽しめる空間を作つた。わたしはこのよつに、自分の意見や自分らしさを出しつ、相手の意見も大切にしていける、そんな関係こそ本当の友達だと思つた。わたしも本当の友達がほしい。自分の意見をこわがらずに言つてみようと思つ。そして、友達のことでも心の目や心の耳を使つて、理かいていきたい。友達を信じて、おたがいがなつとくできる方法を見つけ出せたらすきだと思つ。これから何人の本当の友達に出会えるだらうか。わたし自身のみ力を高め、友達から信らされるよつな人になり、すきな友よつを深めていきたい。

『バレエなんて、きらい』とつ言葉は、ウィニーの心からのさけび声だと思つ。わたしはバレエが大すきだが、ウィニーのこの気持ちも大切にしたい。ウィニーはとても大事なことを教えてくれた心の友達だからだ。

自分の意見をはつきり言ひ、相手を思いやる勇気をありがとう。大好きだよ、ウィニー。

「バレエなんて、きらい」

ジェニファー・リチャード・ジェイコブソン・著 講談社

北海教育評論社賞

小人のへムが教えてくれたこと

札幌旭丘高等学校 一年 山根 里菜

高校に入学して四か月が経った。中学校では、そこそこ勉強ができた私だが、同じレベルの子が集まる高校では下から数えた方が早い。答えが分かっている英語の小テストでさえ毎回追試を食らう始末。「中学校でやっていった勉強法と同じなのに、どうしてうまくいかないんだらう?」こんなことを思う毎日だ。そんな中、以前読んだことのある、著者スペンサー・ジョンソンの『チーズはどこへ消えた?』の続編にあたる本書に出会った。

この物語の世界では、ネズミの「スニッフ」と「スカリー」、小人の「へム」と「ホー」が迷路でチーズを探している。前作では苦労して見つけたチーズが、ある日突然無くなるという事件に対して、すべてに新しいチーズを探しに行ったネズミ。遅れて迷路を探索するホー。そして、その場に留まったへムと比較し、変化にすばやく適応する大切さを述べている。本書では、「取り残された」へムにスポットが当てられている。

「こんなのあんまりだー」

ホーに置き去りにされ、チーズも戻ってこない状況に、へムが放った一言。かつて、共に勉強をしていた友達は、学年で十位以内には入るほど順調らしい。私だつて、やることはやっているのに。「このとき、私とへムは同じ気持ちだっただろう。なぜ自分だけこんな仕打ちを受けるのか、どうしようもなく苛立ちを感じるのだ。しかし心のどこかでこう思う。

「僕はどっしり一緒に行かなかつたんだらう?」

最初から気付いていた。このままではだめなんだと。私は、このへムの言葉を見て、改めてそう感じた。だが、何をどうすれば良いのが全然分からない。へムも同じように、ホーを追って一度迷路に出たものの、自分を追い込む想像により気力を失ってしまふ。

私も、良く分からないまま、勉強時間を増やしたり、簡単な問題を解いてみたりしたが、結果が出ないでいると、何をやっても無駄なように感じてしまふ。「これまでのへムは、私と状況が似ていて、重なる部分が多かつた。しかし私はここで止まってしまうが、へムはあることをきつかけに先へ進んだ。

「従来どおりの考え方をしているは新しいチーズはみつからない」

ホーがへムに残していったメモである。初めはこのメモの意味を分らないでいたへムだが、ここで突如、ホープという少女が現れ、へムに「りんご」を与える。チーズ以外に食料があることに衝撃を受けたへムは、その後自分の考えを改めるようになる。

へムは食料はチーズだけだと思いついていた。では、私はどっしらだろうか。今の勉強法がすべてだと思いついてはいないだろうか。今まで、私は勉強の量を増やそうとしたり、同じような問題をやったりと、単純に量を増やすことしか考えていなかった。しかし、本当に考えるべきだったのは、勉強法そのものなのではないか。そう思った。一歩前に進めたように嬉しくなった。よく考えれば不思議なことだ。なぜもっと早くに気が付かなかつたのだろうか。一つの考えが浮かんだ。私も「無くなった」チーズに縛られていたのだ、へムと同じように。中学生のとき勉強で成功していた私は、その方法が「正解」だと思いついていたに違いない。

「古い信念はあなたを囚人にしかねない」

まさにその通りだと思った。特に成功の記憶があると、それにしがみついて、無意識のうちに「他に方法はない」と思いついてしまふ。新たな発見に感動している私に、へムはもう一つ、大切なことを教えてくれた。

「あなたの足を引っぱる信念がある」

「あなたを向上させる信念もある」

今まで行ってきた事はすべて悪いことだろうか。勉強時間を増やすことは、学力向上のためには必要なことだ。自分にとって必要な信念を選ぶことが重要なのだと気付かせてくれた。

ホープが言った。「迷路の外には何かがあるのかい?」

今まで迷路の中で生活をしてきたへムは当惑しただろう。私も考える。私にとつて迷路とは勉強だ。迷路の外というのは、勉強をしない世界ということだろうか。たぶん違う。きっと、様々な勉強法で満ちている世界だろうと思う。

環境が変化したのなら、自分自身も変化しなければならぬ。本書は、大切なことをたくさん私に教えてくれた。なかなかチーズを探さず決心がつかなかったへムだけれど、新たな発見の連続で、最後は見事変化に適応した。私はまだ、チーズを探しに出かけることすらできていない。

高校に入学してからまだ四か月。勉強の仕方から考え直したいと思う。「私にもできるかな。」「少し微笑んで」「誰にでも変わることはできる。」「彼ならそう答えてくれるだろう。」

「迷路の外には何かがある?」 スペンサー・ジョンソン・著 扶桑社

図書館ネットワークサービス賞

「メロンに付いていた手紙」を読んで

桑園小学校 六年 宮崎 ほのか

自分が成長するチャンスをつかむためには、『偶然・運命』という言葉で終わらせてはダメ、自分で道を切り開き一歩前に進んでいきたい。と強く思いました。

主人公の海斗がメロンの箱の底で見つけた手紙は、同い年の男の子からのものでした。その後、海斗は自分から道を切り開き、夕張まで会いに行き、今までは違う環境の中、様々な体験や、様々な話を聞きます。住む環境が違うだけに、自分とは違う視線で色々な経験をしている事に驚き、自分の考えを変えていきます。その事を私はすごいと思いました。普段の環境から離れた時、自分のいつもの環境に対して幸せやありがたさを感じるのだと思いました。その時、私は運動会のなわとびダンスの時の歌を思い出しました。それは『友よこの先もずっと…』という歌の中に、「当たり前 変わりはえない日々が実は大事 かけがえない意味が」という歌詞があります。当たり前前の普通の毎日がかけがえない事の大切さに気付けるのは、

日常から離れた時、又は何かのきっかけで、気が付けるものではないかと思えました。私のクラスには、勉強の出来る子、運動が得意な子、絵が上手な子など、みんな個性が豊かです。みんなの得意な事を知ると、羨ましく思います。特に、私は運動が苦手なので、運動神経が良い子は、私の憧れの存在です。運動会のなわとびダンスの時も、最初は上手く飛ばず、苦勞をしました。しかし、そこで羨ましく思うだけでなく、出来る友達からはアドバイスをしてもいい、出来ない子とは一緒に練習をしました。そのおかげで、みんな楽しんで踊りきる事が出来ました。私が一歩前に進み成長できたのだと思います。私はあと数か月で小学校を卒業します。今までは、違う中学に行ってしまう友達もいるので『別れ』という思いが強かったです。

私は三年生の時に引っこしてきました。最初は前の学校の友達の事はかり考えていて、なかなか前に進めなかった経験があり、今の生活が楽しいから、「この生活を変えたくない。」とっていました。小学校にはずっと一緒にいたい思い出を作っていたい大好きな友達がいいます、しかし、この物語を読んだ時、私がこれから進んでいく先には、新しい出会いが待っている、もしかしたら、自分の人生を変える出会いや出来事があるかもしれないと楽しみに感じることが出来ました。そして、今の友達とは『別れ』ではないことに気が付きました。卒業で別れた友達と私がそれぞれ違う環境で様々な体験をし、成長する事で、また新たな友情の形が築けると思いました。だから、私は成長のチャンスをつかんでいきたいと思えます。そのため、今は小学校を卒業する事を新たなスタートだと思えるようになりました。当たり前前の日々がかけがえないものだと思付いたので、残り少ない小学校生活を悔いのないよう精一杯がんばりたいです。

「メロンに付いていた手紙」 本田有明・著 河出書房新社

図書館ネットワークサービス賞

君の臍臓を食べたいを読んで

明園中学校 二年 小田島 愛海

「君の臍臓を食べたい」

この言葉は、作中で何度か登場しました。一番最初は、臍臓の病に侵されたヒロイン、山内桜良が、病氣のことを唯一知るクラスメイトである主人公に言った言葉です。このときのこの言葉は、桜良が、昔の人はどこか悪いところがあると、他の動物のその部分を食べれば病氣が治ると信じていたと知り、主人公に言った「冗談」でした。しかし、最後にこの言葉が使われるときは、相手への尊敬や憧れを表す言葉に意味が変わっています。この言葉のほかにも、変化していったものは、もう一つあると私は思います。

主人公には名前がありません。正確には桜良の遺書を読むまでは、人に名前を呼ばれると、その人が自分のことをどう思っているかを考え、その想像を受け取っていました。図書室の先生からは「大人しい生徒」くん、クラスメイトからは「地味なクラスメイト」、学級委員で、桜良の元恋人であるタカヒロからは「許せない相手」。主人公はそう思われていると想像していました。桜良からも、最初は他のクラスメイト同様、「地味なクラスメイト」くんと呼ばれていました。しかし、桜良の病氣のことを知り、仲良くなるにつれ、「秘密を知っているクラスメイト」、「仲のいいクラスメイト」、「仲良し」くんと呼び方が変化していきました。でも、この「仲良し」くんという呼び方に対して、桜良は否定します「じゃあ、どう思っているの?」とたずねても、はぐらかされ、主人公は「仲良し」くんではなく、「????????」くんになりました。しかし、桜良のお葬まいりのときは、桜良の親友である恭子からは、「春樹」と名前がしっかり呼ばれています。これは、桜良と過剰に、桜良からの遺言を読んだことにより、自己完結王子だった主人公が、周りの人達と触れいき、考え方が良い方向に変わっていったことによるものだと思います。呼び方の変化は主人公の気持ちの変化でもあったのだと解釈しました。

逆に変化しなかったものもあります。それは、二人の方向性が常に合わないことです。明るい桜良と大人しい主人公。ホルモンが好きな桜良と普通の肉が好きな主人公。当事者になるにつとめる桜良と傍観者でありたいと願う主人公。ぜんぜん方向性が合わない二人。主人公は、方向性が合わないのは、おたがいが対岸にいるからだと言っていました。同じ方向を見ず、反対側からお互いを見ていたのだと。

だから、互いを尊敬し、憧れることができたのです。私は、その言葉がすごく素敵だと感じ、感情移入していたこともあり泣いてしまいました。普通は、自分の好きなことを相手に理解してもらおうとしたり、逆に相手に合わせてしまいます。でも、それをせず、それを楽しんでいる二人は、愛情や友情だけで表せない、本当の運命の人なのだと思います。

私は、この本を読んでいるとき、少し、不思議に思っていたことがありました。それは、何故、主人公は桜良の名前を呼ばないのか、ということとです。私は、こんな性格の主人公が、どのように桜良を呼ぶのか気になっていました。しかし、主人公は一回も名前を呼ぶことがありませんでした。ずっと、どんなときも「君」です。何故?その謎は桜良が遺書の中で解き明かしてくれました。前述した通り、主人公は、名前を呼ばれたとき、その人が自分をどう思っているのか想像してしまいます。その想像が正しくても間違っているかも、どうでもいって。でも、主人公は、桜良のことをどうでもいいとは思っていませんでした。いずれ失ってしまふ桜良。その桜良に「友達」や「恋人」という意味がつかぬのが怖かった。主人公はそう思っていたのではないかと桜良は遺書で語っています。臆病な主人公らしいですね。でも、私が主人公の立場だったとしても、怖くて名前を呼べないかもしれない。そう考えると、病氣になってあまり時間が残されていないにも関わらず、いつも明るく笑い、ときには病氣のこともジョークにしてしまう桜良は、本当に強くてカッコいい人なのだと思います。

私は、この本を読んで、すごくたくさんさんのことを学びました。今まで読んだ本の中で、一番心を動かされたと思います。特に印象に残った言葉は、桜良が主人公に言った、

「私も君も、もしかしたら明日死ぬかもしれないにさ。そいつの意味では私も君も変わんないよ、きつと。一日の価値は全部一緒なんだから、何をしたかの差なんかで私の今日の価値は変わらない。」

という言葉です。本当にその通りだと思ひ、病氣の人を悲観的な目で見ていた自分を、とても愚かだと感じました。これから先は、命が今あるのは当たり前だと思わず、周りの人に感謝して、一日を大切に生きていきます。

「君の臍臓を食べたい」 住野よる・著 双葉社

光村図書出版賞

家族の形

向陵中学校 一年 齋藤 亜唯

私は、「そして、バトンは渡された」という題名にひかれ、本を手にとった。この本でいう「バトン」とは一体何なのだろうか。

優子は学校の進路面談で悩みはあるのかと先生に問われた。だが、優子には「悩み」というものが無かった。むしろ、そのことを申し訳なく思っている程だった。

そんなことがあるのだろうか。私は驚いた。誰でも悩みの一つや二つはあるだろう。何せ優子には、父が三人、母が一人もいるのだ。そんな特殊な家族環境で育った彼女になぜ悩みが無いのかを不思議に思った。だが、そんな思いは本を読み進めていくうちに、あっという間に消え去った。

優子は愛されていた。くくった生みの親である母親。実の父親である水戸秀平。優子にピアノを与えてくれた梨花さん。静かに見守っていてくれた泉ヶ原さん。そして、今の父親である森宮さん。優子はこの五人の両親の元を渡り歩いた。

優子の実の父親である水戸秀平は仕事の都合でブラジルへ転勤する事になった。しかし、優子は友達と離れたくなかった。そこで、優子は秀平の再婚相手の梨花さんと日本で暮らす事を決めた。その後、梨花さんは何度も再婚をし、優子は何度も名字が変わっていった。

私は憤りを感じた。生活環境をころころと変えたところで幸せになれる筈が無い。第一、優子の気持ちを考えているのか。

しかし、それは違っていた。梨花さんはいつだって優子の事を一番に考えていた。ピアノが欲しいと優子が言った時、欲しい物は何でも与えられる様にお金持ちの泉ヶ原さんと再婚した。自分が入院する事になった時は優子に迷惑をかけたくないと新しい保護者を探して家を出て行った。

私の心は温かくなった。梨花さんの行動はどれも愛にあふれている。血がつながっているから家族という訳では無いのだ。家族には色々な形があるのだから。

私はゆっくりと本を閉じた。そして改めて題名について考えてみた。きっと、「こ」と言う「バトン」とは優子自身の事だ。「渡された」というのは五人の両親の元を渡り歩く優子の姿を「リレー」にたとえたものなのだろう。

優子はどんな時でも幸せだった。だとしたら、私はどうだろうか。優子と同じ環境にいたとして明るく生きられるのだろうか。いや、私はこの先どうなってしまうの

だろうという不安で決して明るくはられないだろう。そんな人生を幸せとは思えないかもしれない。それに比べて優子はどうだ。平凡で変わり映えのない生活にも幸せを感じ、感謝していた。私は、そのような考え方が出来る優子を少しうらやましく思った。考え方が違うのは、やはり生活環境が特殊だからなのか。

そこで私の脳裏にふとこの言葉がよぎった。
「優子ちゃんと暮らし始めて、明日はちゃんと二つになったよ。自分のと、自分よりずっと大事な明日が、毎日やってくる。すごいよな。」

これは作中で森宮さんが優子に言った言葉だ。この言葉が私の胸を刺した。優子がいつでも幸せだったのは考え方の違いなんかでは無い。皆が愛情を注いで大切に育てていたからだ。私は自分の心が誰かに包まれたかの様に温かくなっていくのを感じた。

私はこの本を読んで学んだ事が二つある。

一つ目は、普段の日常が当たり前では無い事。私にとっては父や母がいる事が「普通」だが優子にとっては違った。私にとつての「当たり前」は「当たり前」では無い事を知った。私はいつも親に強く当たってしまう。心のどこかでは駄目だと思ってるけれど、そうしてしまふ。なぜなのかは分からない。私の心にはいつも、申し訳ない気持ちが広がるのだ。だが、それは自分でも分かっているからなのではないだろうか。どんなに親に強く当たったとしても、この日常が変わる事は無いと。だとしたら、それはとても幸せで素晴らしい事だ。これからは当たり前で変わり映えのない日常に感謝することが出来る様な気がした。

二つ目は、家族には色々な形があるという事。私は、この本を読んでいなければ「家族とは何か。」と問われた時に、「血がつながっている人たち。」としか答えられなかっただろう。だが、見方が変わった。「血のつながり」だけが家族ではないのだ。互いに家族だと認識していれば、それは家族と言えるのではないかとも思った。私は、この本から家族がどれほど尊く、大切なものなのかを学んだ。この本が、家族とは何かを考えるきっかけをくれたのだ。

私は、これらの事を優子たちが教えてくれた。私も優子たちの様にまだ誰にも分からない大きな未来へとバトンを渡したい。この本は、何気ない日常に感謝して生きようと思わせてくれた一冊だった。

「そして、バトンは渡された」 瀬尾 まいこ 著 文藝春秋

佳作

◇小学校の部 低学年

自由	おどろいた、ものづくり方	札幌市立北野台小学校 1年	板谷 美 咲
自由	カレーライスおかわり！	札幌市立開成小学校 1年	小野 芽衣子
自由	ともだちっていいな	札幌市立新琴似小学校 1年	中村 美優萌
課題	わたしがアメを作るなら	札幌市立伏見小学校 1年	山口 愛子
指定	あしたもみんなをえがおにしたい	札幌市立桑園小学校 1年	仲谷 心華
指定	「きのうをみつけない！」をよんで	札幌市立和光小学校 1年	二階堂 晴
自由	出産、パパ大かつやくの日	札幌市立澄川西小学校 2年	井手野 愛梨南
自由	「おねえちゃん」になれてよかった	札幌市立北野台小学校 2年	中 川 華
課題	心のきずな	札幌市立平岸高台小学校 2年	芹川 礼奈
課題	魔法のじっけんは失敗でしょ	札幌市立西岡北小学校 2年	毛利 優月
指定	たった一のどんぐりが	札幌市立桑園小学校 2年	木村 玲華
課題	私のがのろいアメを作ったら	札幌市立伏見小学校 2年	鈴木 莉心

◇小学校の部 中学年

自由	小麦はすてき	札幌市立新琴似小学校 3年	小野 優希
自由	「紙のむすめ」を読んで	札幌市立澄川西小学校 3年	三浦 百々音
自由	わたしの大好きで大切な本	札幌市立澄川西小学校 3年	吉田 咲穂
課題	友情が教えてくれたこと	札幌市立厚別北小学校 3年	鈴木 爽太
課題	食べてみたい「へボ飯」	札幌市立伏見小学校 3年	前田 海音
課題	じぶんと約束	札幌市立円山小学校 3年	村尾 優衣花
課題	毎日を大切に生きること	札幌市立澄川西小学校 3年	山田 結月
指定	思い出の中のにこるもの	札幌市立桑園小学校 3年	加藤 環希
自由	リンカーンのみか	札幌市立山の手南小学校 4年	長 堀 巧
課題	「かみさまにあいたい」を読んで	札幌市立桑園小学校 4年	須田 健心

◇小学校の部 高学年

自由	地震の怖さと人の温かさ	札幌市立新光小学校 5年	佐藤 奈央
課題	令和に願う平和への願い	札幌市立白楊小学校 5年	杉岡 璃音
課題	「ぼくとニケ」を読んで	札幌市立日新小学校 5年	倉知 茉耶
課題	かべのむこうになにがある？	札幌市立日新小学校 5年	坪 瑠 樹
自由	留守番なんてこわくない	札幌市立大谷地小学校 6年	梅澤 里寧
自由	人と人のつながりが起こした奇蹟	札幌市立桑園小学校 6年	齋川 万結
課題	一つの勇気	札幌市立清田緑小学校 6年	東地 心菜
指定	「赤はな先生に会いたい！」を読んで	札幌市立北陽小学校 6年	鎌田 香桜

◇中学校の部

自由	何事も実行する	札幌市立向陵中学校 1年	今村 壮吾
自由	当たり前は特別だ	札幌市立向陵中学校 1年	進藤 真央
自由	そういうふうになっている	札幌市立福井野中学校 1年	中嶋 莉緒
課題	あきらめないということ	札幌市立向陵中学校 1年	片山 碧彩
指定	失敗を恐れずに	札幌市立向陵中学校 1年	中島 陽莉
自由	共同体と自己の在り方	札幌市立陵北中学校 2年	五十嵐 蓮太郎
自由	ミヤマの社 君に捧げる恋の舞を読んで	札幌市立藤舞中学校 2年	斉藤 彩乃
自由	当たって砕ける	藤女子中学校 2年	吉田 優衣
自由	考えられる人になるために	北嶺中学校 3年	武田 稜也
自由	「静かな大地」を読んで	札幌市立向陵中学校 3年	堀之内 萌
自由	生と死	札幌市立向陵中学校 3年	三木 悠夏子
課題	「星の旅人」を読んで	北嶺中学校 3年	藤原 知矢

◇高等学校の部

自由	現実と夢	札幌光星高等学校 1年	土岐 希美
自由	「秒速5センチメートル」を読んで	札幌光星高等学校 1年	富岡 由見
自由	安楽死と環境と私の思い	市立札幌啓北商業高等学校 1年	目黒 七海
自由	パラレルワールド・ラブストーリー	市立札幌啓北商業高等学校 1年	山本 翔彌
自由	可哀想な人間	北海道札幌啓成高等学校 2年	伊藤 優花
自由	知識と感情の差異	札幌光星高等学校 2年	関 大智
自由	狼王ロボ	市立札幌啓北商業高等学校 2年	広沢 優香
自由	平和への道標—沖縄戦の真実を知って	北海高等学校 3年	小西 海翔

優良賞

◇小学校の部 低学年

課題	こころをあたためよう!!	札幌市立東園小学校 1年	佐藤 日和
課題	魔法ののろいアメ	札幌市立伏古小学校 2年	小関 夏果
課題	のろいアメは大好きを思い出させるまほうのアメ	札幌市立山の手小学校 2年	志貴 美遥

◇小学校の部 中学年

自由	「ゾウの森とポテトチップス」を読んで	札幌市立新琴似南小学校 3年	上野 晴南
課題	「季節のごちそうハチごはん」を読んで	札幌市立福住小学校 4年	長内 航平
指定	心の中の家	札幌市立福住小学校 4年	岩本 亜澄

◇小学校の部 高学年

課題	一步ふみ出す勇氣	札幌市立新琴似小学校 5年	川 湊 綾 紗
自由	言葉	札幌市立前田小学校 6年	荒木 奏海
課題	“失敗” ~もう一つの屋久島から学んだこと~	札幌市立前田小学校 6年	南 采花

◇中学校の部

自由	本当の「しあわせ」	札幌市立中の島中学校 1年	江本 乙葉
自由	夢	札幌市立向陵中学校 1年	岡 理紗子
自由	村岡花子さんへのときめき	藤女子中学校 1年	野崎 愛加利
自由	読者への愛	札幌市立稲積中学校 2年	大盛 音愛
自由	ブライマの生き方について	札幌市立琴寒中学校 2年	小野田 百合奈
自由	途絶えた命	藤女子中学校 2年	高輪 柚希
自由	人生を決める「心。」	札幌市立向陵中学校 3年	小名木 優里
自由	「フランケンシュタイン」を読んで	北嶺中学校 3年	高桑 潤明
自由	人生永遠の書	北嶺中学校 3年	中野 剛瑠

◇高等学校の部

自由	「道」	札幌光星高等学校 1年	三宅 純蓮
自由	「明るい夜に出かけて」を読んで	北海道札幌啓成高等学校 2年	梶 倫瑠
自由	憧れのひと、「セーラ」	札幌光星高等学校 2年	坂東 那菜
自由	本当の気持ち	市立札幌啓北商業高等学校 2年	本間 悠馬

第65回 札幌市読書感想文コンクール 入賞者一覧

令和元年度

札幌市長賞	札幌市立向陵中学校 3年 課題	渡邊 光麗 ある晴れた夏の朝に届くように
札幌市議会議長賞	札幌聖心女子学院高等学校 2年 自由	児玉 優子 『女の一生』を読んで～伊藤を通じて感じたこと～
札幌市教育長賞	札幌市立清田緑小学校 3年 自由	東地 賢頼 お母さんおそろべし
札幌市学校図書館協議会 会長賞 1	札幌市立白楊小学校 2年 課題	川上 慶悟 心をさがそう
札幌市学校図書館協議会 会長賞 2	北 嶺 中 学 校 3年 自由	玉 田 光 チャリィが教えてくれたこと
札幌市学校図書館協議会 会長賞 3	札幌光星高等学校 1年 自由	加藤 萌香 私の救世主
札幌市PTA協議会 会長賞 1	札幌市立栄北小学校 5年 自由	横山 英伶 命の差別
札幌市PTA協議会 会長賞 2	札幌市立向陵中学校 2年 課題	増田 美玖 『ある晴れた夏の朝』と動かされた心
札幌市PTA協議会 会長賞 3	市立札幌旭丘高等学校 1年 自由	岩見 美結 真の優しさ、真の幸せとは-「こんなにも優しい 世界の終わり方」を読んで-
北海道高等学校PTA 連合会石狩支部長賞	札幌聖心女子学院高等学校 2年 課題	豊嶋 紅安 平和をつくるコミュニケーション
光陽社賞	札幌市立大谷地小学校 2年 課題	豊沢 峰々 のろいアメはまほうのアメ
キハラ賞	札幌市立琴似中学校 2年 課題	野崎 幸子 星を目指して
教育出版賞	札幌市立厚別西小学校 4年 自由	坂本 温音 ウィニー、勇気をありがとう
北海教育評論社賞	市立札幌旭丘高等学校 1年 自由	山根 里菜 小人のへムが教えてくれたこと
図書館ネットワーク サービス賞 1	札幌市立桑園小学校 6年 指定	宮崎 ほのか 「メロンに付いていた手紙」を読んで
図書館ネットワーク サービス賞 2	札幌市立明園中学校 2年 自由	小田島 愛海 君の臍臓を食べたいを読んで
光村図書出版賞	札幌市立向陵中学校 1年 自由	齋藤 亜唯 家族の形

学校賞

毎日新聞社賞
キハラ北海道営業所開設50周年記念賞

札幌市立向陵中学校
札幌市立向陵中学校